

つながる在外校

～オンライン時代の交流の形～



提供：シアトル四つ葉学院



提供：ブノンベン日本人学校

4 調査結果

③グアムでどのような環境保護活動を行っているか調べる。

・毎週1回ゴミ拾いを行っている。

【ゴミ拾いから分かったこと】

①特定の海岸にゴミが多い
②ペットボトル、ビニール袋、日焼け止め容器が特多い。

グアム大学

観光で訪れる人々によるプラスチックゴミのポイ捨てが多いのではないかと

提供：グアム日本人学校

ここ数年、急速に普及したオンライン会議システムなどによって、在外校同士が距離と時差を超えてつながる例が出てきている。そこには思いがけない出会いがあり、またスケールの大きな学びも生まれているようだ。

さまざま変わりする在外校の交流事情について、AG5プロジェクト(<https://ag5.s>)を通して在外校関係者のネットワークづくりに取り組んできた海外子女教育振興財団(JOES)の佐々信行さんに話を聞いた。

後半では、オンラインをフル活用して生まれた在外校同士の学校ぐるみの交流と、世界中の二三〇〇人の子どもたちがSDGsをテーマに動画をつくり、語った「世界同時授業」を紹介する。

(取材・文 只木良枝)

※政府援助対象校の名称は「海外子女教育」表記基準で掲載しています。

孤独な在外校

日本人学校や補習授業校など在外校の多くは、地域に一枚から数校しかない。仮に同じ町に日本人学校と補習授業校があっても、開校日がずれていたり、授業のスタイルや進め方が違ったりして、合同で授業をするのは難しい。

一方で、イベントを共催する例は多い。たとえばオランダでは在蘭日本商工会議所が主催して、毎年六月にオランダ国内にあるすべての補習授業校および日本人学校の合同運動



提供：サン・ホセ日本人学校

会を実施しているという。ここまで大規模でなくても、日本人学校と補習校の合同イベントや、修学旅行先で現地の在外校を訪問しての交流などは、これまでも行われてきた。二〇一一年度からは文部科学省の制度として「巡回指導」も始まっている。これは派遣教員のいない補習授業校等に、近隣にある日本人学校等の教員が指導・助言するもので、交流を目的としたものだ。

しかし、オンラインを活用した例は、研究授業や交流イベントなどを除けば珍しかった。学校の通信環境や教室の視聴用設備の整備が追いついていないことも大きかったかもしれない。長く在外校支援に携わってきたJ.O.E.Sの佐々信行さんは「まったくなかったわけではないんですが……」と言う。

二〇一〇年代には、インターネットを活用した交流の芽が生まれた。南米のサン・ホセ日本人学校（コスタリカ）は、隣国のパナマ日本人学校（パナマ）と一四年ごろから交流している。佐々さん自身も、一五年の巡回指導で訪問したワルシャワ日本人学校（ポーランド）とブダペスト日本人学校（ハンガリー）がスカイプでつないで合同授業をしている様子を見学したことがある。スカイ

プは、〇三年に開発されたインターネットを活用したビデオ通話システム。基本機能は当時すでに無料で使ってきたのだが、なぜ、在外校交流のツールとして普及しなかったのだろうか。

「ひとこと言えば、ハードルが高かったんでしょう。PCにアプリを入れてユーザー登録をしないと会話に参加できません。アカウント作成に抵抗がなく、ウェブカメラなどの機材を持っていない人でないとできなかった。たまたまそういう先生がいる場合だけ、実現したんでしょう」ただでさえ忙しい教育現場。新しいアプリを導入して慣れ、必要な機材を購入してまでオンライン交流をするのはいへんなことだ。通信トラブルもある。「私はICTが苦手」「できる人だけがやればいい」が普通だった。まだまだしばらくはそれが続くものだと、誰もが思っていた。

オンラインがやってきた

ところが事態は急変する。コロナ禍に見舞われた世界各地でロックダウンが相次ぎ、学校が休校になった。子どもたちの学びの場の確保として、各校でオンライン授業が実施される

ようになった。

「もはや、オンラインはイヤ、ICT苦手なんて言っていられなくなっただけです」

いったん使いはじめると、オンライン会議は便利だった。もちろん、対面でのコミュニケーションと比べると不満はあったが、遠隔地とのリアルタイムでのやり取りが可能という圧倒的なメリットがあり、この点だけはそれまでICTを敬遠していた人も認めざるを得なかった。専用アプリやアカウント登録不要のオンライン会議アプリが普及したのも大きかった。

この新しいツールを手にした在外校は、各地でつながりはじめる。

各地で始まっている交流

在外校は世界中にある。日本人学校、補習授業校、各地の補習教室など、J.O.E.Sのリストにあるだけでも三五〇校を超える。（二〇二三年一月号本誌「たぐいまれな何人!」。それら在外校のなから、いくつか取り組み例を紹介しよう。

サン・ホセ日本人学校は、アスンシオン日本人学校（パラグアイ）およびアグアスカリエンテス日本人学



提供：シアトル四つ葉学院



提供：シンガポール日本語文化継承学校

校（メキシコ）とオンラインでの合同授業を実施している。小学部八人、中学部三人の同校の全学年が交流。学活、道徳や生活科、国語、英語、社会科学等、文系教科での合同授業が多いという。

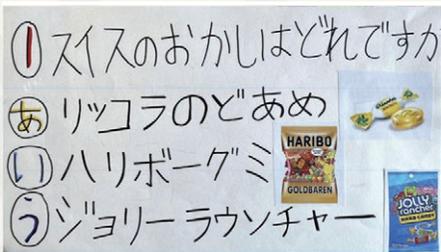
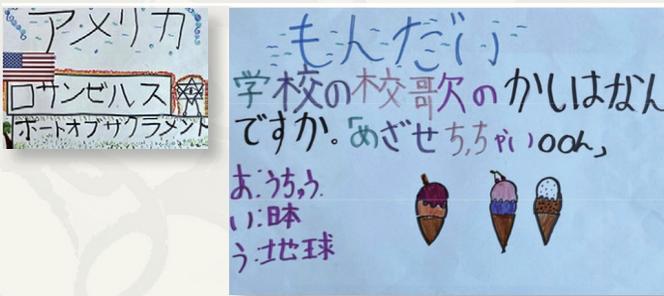
補習授業校や補習教室でも交流が進んでいる。

シンガポール日本語文化継承学校では、小四・小五が二二年三月に愛知県の公立小学校と交流した。ただ同校は日曜日開校、交流相手校は平日授業なので、リアルタイムではなくビデオでの交流を実施した。

シアトル四つ葉学院も、国内外の学校との交流事例が多数ある。小一は二〇年三月に都内の公立小と、国語単元「こんなことがあったよ」「聞きたいな友だちの話」で発表し合った。また小五・小六の十五人は、二一年九月に京都府内の私立小と英語と日本語を使って教科書の発展活動を行った。中二は、アメリカの補習授業校とSDGsについて意見交換した。さらに二〇年九月には、小四が国語教科書に掲載されている「ランドセルは海を越えて」の作者・内堀たけし氏に直接交流を申し入れて実現。西尾校長は「教科書の内容だけではわからない状況を作者に直接確かめたり、質問したり、意見や感想

「世界の補習校」学習発表会で使用したスライドの一部

提供：香港補習授業校



を伝えられたことは、かけがえのない学びとなった」と言う。

香港補習授業校では、小六がさいたま市国際ジュニア大使と交流。「日本文化を伝えよう」の単元を発展させて、香港における日本文化を伝え、また継承語クラスの小四・小五は、テーマ学習「世界の補習校」において、ポート・オブ・サクラメント補習授業校（アメリカ）、ハリファックス補習授業校、モントリオール補習授業校（いずれもカナダ）、チュ

ーリツヒ補習授業校（スイス）、上海浦東補習授業校（中国）と、オンラインだけでなくビデオレターの交換や補習校での生活についてのアンケートなど多様な交流を実施した。そしてこの交流を通して学んだ各国や地域について学んだことをグループでまとめ、補習校の学習発表会の場で発表した。多くの学校との交流が実現した背景には、母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）学会の存在があり、交流先は同学会内の継承

語SIG会員部会 (Special Interest Group : SIG 海外継承日本語部会) で募集した。

授業以外でも、オンラインで教職員交流や研修などを行った例がある。チューリッヒ補習授業校では、国内にあるジュネーブ補習授業校と二十年以上前から教員同士の合同研修会・情報交換会などを開催してきたが、コロナ禍を受けてオンラインに切りかえた。授業の工夫や、悩みや取り組みを共有し、お互いの授業や問題解決に生かしている。

複数の補習校が協働して学校説明会をオンライン開催した例もある。



提供 : シンガポール日本語文化継承学校

Bayside Japanese School (オーストラリア・シドニー) は、同じエリアにある二校の日本語学校に声をかけて、合同でオンライン学校説明会を開催した。いずれもNPOによる学校で商業的な競争が存在しないからこそ実現したことで、参加者には「一度に三校の話を開けて検討できた」と好評だったという。

在外校にとって「つながる」とは

在外校がつながることには、どんなメリットがあるのだろうか。

児童生徒にとっては、デイスカッションの参加者が増えたり、いつもと違った授業を受けられたりといった刺激になる。特に少人数の学校でそのニーズは高い。

なによりも、自分と同じように日本を離れて暮らす日本人の子どもたちの存在は励みになる。また「世界中で日本語を学習している子どもがいる」(香港補習授業校) という実感は大きなものだ。サン・ホセ日本人学校の川上校長は「子どもたちはつながることを楽しみに、次回の交流に向けての準備学習をがんばり、それが学習効果を高める」「お互いの国のことを紹介したり、知ることが

国際理解や現地理解につながる」と子どもたちの様子を話している。

また、生きた日本語で会話する貴重な機会になる。香港補習授業校やシンガポール日本語文化継承学校では、例年夏休みに一時帰国して体験入学する子が多かった。それができなかったコロナ禍の間、日本の学校や在外校とのオンライン交流がその代替となったという。

そして、教師にとっては授業に役立つ情報や悩みの共有・相談が可能になる。これまで孤独だった在外校にとっては、この交流は何より心強い機会となったことだろう。

つながるための課題、そして未来

オンラインという手法を得て、使いこなせる人も格段に増えた。環境も整い、あとは担当者やる気だけ……。そうはいつても、課題は山積みみょうだ。

まず、いうまでもなく時差がある。日本とアメリカ西海岸・東海岸の三拠点を結んで交流授業を実現したシアトル四つ葉学院の例もあるが、時間割上の制約やスクールバスの運行スケジュールなど各校の事情があり、タイミングを合わせるの容易では

ない。

そして意欲の問題だ。「つながるための課題(難関)は、相手校の校長先生の意欲(?) だけ」(シアトル四つ葉学院) という声もあるが、担当者の熱意だけでは交流事業は実現できない。「つながる必要性をあまり感じていない学校とは、交流が続かなかった」(サン・ホセ日本人学校) という経験もある。継続的につながるためには、学校全体での理解の共有と、担当者同士の人間関係の両方が重要で、推進するための環境を整える必要がある。サン・ホセ日本人学校では、交流する前に教職員同士の全体ミーティングを行い、また時間調整や授業進度等を担当者同士で気軽に連絡が取れるよう、Google チャットを設定しているという。

またそれぞれ限りある授業時間のなかで交流の時間を捻出することは簡単ではない。学校行事や定期試験もあるし、補習校は授業時間がそもそも少ない。

たんにつながるだけでは意味がない。その内容の充実を指摘する声もある。

「交流ばかりでは学習単元がこなせなくなるので、学びを含めた交流が理想的」(アムステルダム補習授業校)

「複数の教科をつなげる教科横断型を構築するため、相手側の他教科にかかわる先生がたの協力や進度の確認も必要」(シアトル四つ葉学院)

費用の負担も看過できない。オンライン会議システムは、コロナ禍の社会では緊急避難的に無償あるいは安価で提供されてきた。それが今後もずっと可能なのか。財政に余裕のある学校ばかりではないし、運営経費が重くのしかかるところもあるだろう。

しかしそれでも交流の価値は、このように熱いことばで語られている。

「他国を知る国際理解教育や自国の現地理解教育にも役立つ。課題としては時差の克服とお互いのつながりたい気持ちの持ちようだと思う」(サン・ホセ日本人学校 川上校長)

「日本語を実際に使う場面があり、伝えたい、知りたいという気持ちから日本語学習のモチベーションの向上につながる。自分たちとは違うほかの国や地域の様子や暮らしについて学ぶことができる。発表のために自分自身や自分たちが暮らす地域についてふり返り、その特色やユニークさなどを実感することができ」

(香港補習授業校 堀内先生)

「人の輪が広がること、刺激し合えること、励まし合える同志を得ら

れること、殻に閉じこもらずに他者に目を向けることなど、在外校がつながることに大きな価値がある」(アムステルダム補習授業校 岡部先生)

「子どもたちだけでなく教師自身が主体的に授業錬磨し、他校との研修を通して対話的に実践成果を共有するためにも、つながることは必要。教師の見方や考え方を広げたり深めたりすることで深い学びのある授業づくりができると考える」(シアトル四つ葉学院 西尾校長)

最後に、JOESの果たす役割を考えてみたい。

二〇一七年から進めてきたAGSプロジェクトでは、在外校の交流が大きなテーマの一つになっていた。世界各地の在外校が訴える困り事やノウハウを共有する場づくりを目指していた。

「当初は孤独な在外校をなんとかつなぎたいと思ってネットワーク事業に取り組みはじめたのですが、それからわずか数年、コロナ前後でこんなに状況が変わるとは」と、ずっとかわってきた佐々さんは驚きを隠さない。

二〇二〇年からのコロナ禍を受けて、「補習校ネット」として情報交換



提供：サン・ホセ日本人学校

会等を開催。ふだんはメーリングリストでやり取りをして、折りに触れてオンライン交流会を実施し、この四月には四十四回目を迎えた。登録者は世界中に二五〇人。「つながってきた実感がありますね」と佐々さん。特集の取材は、ちょうど新年度の会員継続登録の時期。オンライン取材中のPC画面に、たびたびメール受信のポップアップが出ているようだった。

「このインタビュアー直前に、案内メールを出したばかりなんです。あ、継続登録また来ましたよ」と、弾んだ声を上げる佐々さん。四月四日現在の登録者数は三二七人、今年度は「情報交換会」「授業研究会」「初任

者研修会」を実施する予定だという。

情報交換会の大きな特徴は、学校単位ではなく、あくまでも個人の資格で参加していることだ。組織を代表するかどうかという意思決定が遅くなるし「持ち帰って検討します」になる。しかし個人同士だと話が早い。メーリングリスト上で知り合って「オンラインで何かいっしょにやろうよ」と話がまとまることも多い。また小・中だけでなく、幼稚園と高校の教員の自主的なグループも誕生し、定期的にミーティングを行っているのだそう。

「こういう場合は、誰かがサポートしないと維持できない。それが可能なのは、JOESしかないんですよ。在外校のことをよく知っていて、歴史と実績があって、公的な性格を備えている社会的な信頼のある団体として、やらなくちゃいけないと思っています」

当面の目標はメーリングリスト登録者一〇〇〇人だという。

世界中で一〇〇〇人、そしてそれ以上の教師がつながる未来。それはやがて在外校だけでなく、日本の教育の姿を変えていくのではないだろうか。

JOES Davos Nextの開催が、 全校の交流へ発展

ブノンペン日本人学校・グアム日本人学校 ミニ対談

「姉妹校」と呼びたくなるような、学校ぐるみの交流が生まれている。三時間の時差を超えてつながった二つの小さな日本人学校。児童生徒数が少なく、授業のディスカッションが十分にできないという共通の悩みを抱えていた。

オンラインでの交流は二〇二二年秋のJOES Davos Nextをきっかけに中学部と小五・小六で始まり、いまでは全学年に広がっているという。その中心となってきたふたりの教師が語り合った。



グアム日本人学校
岡村尚弥先生



ブノンペン日本人学校
藤原正幸先生

交流が始まったきっかけは？

藤原 JOES Davos Nextで他校と交流したい学校は？という呼びかけがあり、希望を出しました。

岡村 交流希望校のリストを見て、ブノンペン日本人学校は持っている思いがグアムと近いと感じましたね。
藤原 お互い小さい学校だから、日本人の同世代の子とつなげてやりたいういう気持ちで共通していました。

岡村 少人数同士だと、交流のときにみんなが話すことができます。相手が四十人学級だったりしたら、こっちが四人しゃべるのに相手はしゃべる一人と待っている三十九人ということになりませんからね。

1 テーマ設定の理由

- ①輸入品が多い。
- ②スーパーから食材がなくなることが多い。
- ③地産地消があまりできていない。



グアムで安全な食を安定して、手に入れられるようにするには？

提供：グアム日本人学校

私たちができることは何か、話し合いをしました



【意見】花植え、ペットボトル・缶のリサイクル、ゴミ拾い、ポスターを校門周辺に貼るetc

提供：ブノンペン日本人学校

ることを考えて、自己紹介をふだんよりちょっと長めに取りました。
藤原 第一回は一時間でしたが、十二月八日に実施した第二回は二時間分、小五・小六と中学部に分かれて開催しました。

最初小五以上だった交流が、いまでは全校で実施中とか。

藤原 小四が「カンボジアの魅力の世界に発信する」の発表相手を探していて「グアムに聞いてもらえますか」と。それで岡村先生にお世話になったんです。

岡村 ありがたいです。交流を始めるとエネルギーがいるんですが、藤原先生とブノンペンのパワーをいただいています。

藤原 その後、小学校低学年にも広がりました。私から交流を勧めたわけではなく、どの学年も一年間やったことをまとめて発表する時期で、交流がその場になればと思ったんでしょう。他校の児童生徒に聞いてもらうというのは、気心知れた数人の



提供：グアム日本人学校



提供：フノンベン日本人学校

クラスメイトに発表するのは違ってドキドキ感もありますし、プレゼンの力もすぐ上がるんですよ。

岡村 ともかく発表の場がないので、

ほかの国に住んでいる子に発表したということは、子どもたちの自信につながります。小二のクラスに娘がいるんですが、「フノンベンの子とこんな話をしたんだよ」「カンボジアってこういうところだね」と、家でもよく話すんですよ。そういった面で、低学年の子たちにとっても、交流はとてもいいことだと思います。

藤原 何かやりたいなと思ったときに「いっしょにやろうよ」と声をかけられる相手校を持っているのは、とても価値があります。理想を言えば学期に一度くらいの頻度でつながれたらと思っています。

岡村 やっぱり継続していくことが大事。来年度はいっしょに平和学習をしようと考えています。

藤原 お互い戦争の傷跡のある国なので、子どもたちにもいろいろ調べさせて。

岡村 そうですね。

——交流するうえでの課題はどんなことでしょうか？

藤原 先生がたの理解が重要です。

「自分がやりたい！」という気持ち

だけではうまくいきません。子ども、先生がた、自分の三者にとって有意義な時間となるような交流を意識しています。

岡村 交流先によっては、オンラインのアプリが使い慣れたものでない

こともあり、やりにくいという声も。藤原 あとは保護者の理解です。交流のプレゼンづくりに熱中するあまり試験勉強がおろそかになってしまっているのではないかと、保護者が心配されることもあります。もう一つは学校行事。中学部は定期試験があり、文化祭とか運動会とか大きなものを避けると、交流日程を入れられるところはほんとうに少ない。

岡村 行事の時期も、学校それぞれで違いますし。日程を両校ですり合わせないといけない。

藤原 だから、早めの日程調整が最重要ポイントですね。

岡村 それと、両校にメリットがあること。ある国内校から、「うちは複数クラスあるから、複数回同じ交流をやってほしい」と言われたことがありまして(笑)、「いや、それは」と断って、結局全部違う内容で交流したんですが。片方のメリットだけじゃ交流は続かない。お互いのためにならない。

藤原 一回きりの交流なら、全クラ

スに集まってもらって「カンボジアってこういう国」と発表するような形であれば成立すると思うんです。でも、我々のようにつながりを深めていこうとすると、それは違う。

岡村 各校いろんな事情があります。結局、子どもたちにとつていいと思うことをやればいいんです。たとえば大規模校の一つのクラスとだけつながってもいい。教員にももっと柔軟な考え方が必要かなと。

藤原 まずはつながってみるのが大事。私は、長くつながる相手校なら、生徒同士が連絡を取り合えるようにできたと思うんです。たとえばアニメの話をしたくても話相手がない子は、交流先に「アニメが大好き」と自己紹介する子がいたら、直接語り合いたいでしょう。もちろんいろいろな問題があつて実現は難しいんですが、安全を確保したうえで、個人的な交流ができる方法がないか、ずっと考えています。

岡村 交流は、「こうなるかもしれないから、やめとこう」ではなくて、「喧嘩しちゃうってすみません」と言えるくらいに、教師の方も腹をくくってやっていかないとね。

——ありがとうございます。今後の交流がますます深まることを祈っています。

SDGsをテーマに二二〇〇人が交流

仙台市広瀬中学校・国内校と、世界七か国の日本人学校の子どもたち

オンラインの交流のよいところは、大人数のイベントが比較的容易に開催できることだ。レクチャー形式なら、参加者は数百人でも数千人も、技術的には対応できる。

オンラインディスカッションでも、やり方を工夫すればかなり大規模なことができるようだ。今回が四回目の開催となる「世界同時授業」は、学校のクラス単位で参加する。SDGsをテーマに作成した動画を事前に共有、それを見たうえでオンライン参加し、同じグループになった学校と語り合うイベント。今年は世界七カ国の日本人学校と、青森から沖縄までの国内校が参加して開催された。

グループで 動画の感想を共有

正式には「世界へ発信 私たちがつくる持続可能な社会オンライン発表会」。発案して推進してきたのは、元蘇州日本人学校教師（二〇二二年帰国）で、仙台市立広瀬中学校の研究主任・齋藤暢さんだ。

目的は、「児童生徒が持続可能な社会を実現するために、自分自身に何ができるか考えることを通して、社会参画するための手がかりをつかみ、発表会を通して、よりよい社会の形成に向けた意欲や態度を身につ

けること」。インターネットがあれば世界中どこからでも参加できる、壮大な規模の学習発表会である。

参加各校は、事前にそれぞれの学校で取り組んできたSDGsについての学びや取り組み、さらに持続可能な開発目標の達成に向けた実践を五分程度の動画にまとめる。その動画は教育支援ツールのロイロノート上に保存して共有される。参加校は、同じグループになった学校の動画を前日までに視聴しておき、当日は質問をしたり感想を共有したりする。当日は授業時間の二時限分（約一時間半）を充当し、前半と後半の二回で意見交換。各グループは四、五校



提供：仙台市立広瀬中学校

程度、前半と後半でグループのメンバーが違うので、合計十校ほどと交流することになる。時差などでリアルタイムに参加できない場合でも、動画を提出すれば他の参加校が視聴して感想が届く仕組みになっている。八月一日から広報・受付開始。十月に参加校の教師が参加してリハールを実施、動画と感想提出やロイロノートの使い方を確認した。十一月末、最終的に動画が出そろった時点で、校種、地域ができるだけバラバラになるように交流のグループ分けを行った。

画面でつながった 二二〇〇人

十二月十六日、広瀬中の生徒の司会で世界同時授業がスタート。画面の向こうには、世界と日本各地の教室が映っている。九つのグループがブレイクアウトルームへ。それを二回繰り返した。

あいにく学級閉鎖になってしまったある小学校では、教師が教室に置いたPCの画面を介して子どもたちが自宅から参加。質疑応答は教師が仲介して会場に伝えた。ある高校が音声トラブルでログアウトして入り直すと、ホスト役の広瀬中の生徒が「つながっています」と落ち着いて対応している。受験のために一時帰国中で自宅から個人参加した中三生に、グループのメンバーが「受験がんばって」と声をかける一幕もあった。大きなトラブルなく終了。広瀬中の生徒会副会長が「SDGsの十七の目標達成のために意識を高め、意見交換をしていっしょにがんばっていきましよう」と締めくくった。起立・礼のあとに盛大な拍手。画面には、オンラインの切断寸前まで、名残惜し気に手をふる子どもたちの姿があった。



提供：仙台市立広瀬中学校

「世界同時授業」の
四年をふり返る

仙台市立広瀬中学校 研究主任
元蘇州日本人学校 教諭
齋藤 暢
さいとう みつる



齋藤暢さん

二〇一九年四月に蘇州日本人学校 中学部に赴任、中一の担任になりました。着任早々に、SDGsをテーマにした研究授業を見学。十七人の生徒たちがSDGsの目標を一つずつ担当して発表したのですが、それに感動したんです。資料がきっちり

つくられていて、SDGsに取り組む自分の姿勢をわかりやすくプレゼンしていた。「これはこの十七人だけで完結させてはいけない」と思い、「ぜひほかの学校にも発信しましょう」と力説したんです。

とはいえ、派遣一年目で人脈もなかったもので、まずは知り合いから声をかけました。じつは同郷の先生を頼って、その前々年にクアラルンプール日本人学校（マレーシア）、前年に大連日本人学校（中国）を訪問して、人脈のあるこの二校と蘇州、日本国内の三校を結んで、二〇一九年十月十五日に第一回を開催しました。

このころまだオンラインは一般的ではなく、「テレビ電話で授業なんて」という批判的な声もありました。それが新型「コロナ禍で一変しました。二〇二〇年春、蘇州日本人学校は、校長・教頭とも着任できず、中学部

教員も六人のうち三人が不在のまま新学年がスタートしました。オンライン授業には比較的スムーズに移行できましたが、それでもたいへんでした。地元政府の方針に翻弄されながら「こんなピンチに、なんで日本人学校がノウハウを共有できないんだ」とずっと思っていて、第一波をやり過ぎた夏休みに中国国内の日本人学校十校を訪問。交流と共有の大切さを訴えて回りました。

第二回は、二〇二〇年十二月に開催。そのころ、AGSプロジェクトでJOESや世界中でがんばっている先生がたとも知り合いました。この回は補習授業校がたくさん参加してくれて十一カ国に。全大陸制覇が目標になりました。

どんどん輪が広がって、二〇二一年十二月開催の第三回では、国数は十一でしたが、参加者は二〇〇〇人を超えました。閉鎖中の学校や臨時休校になった学校の生徒が自宅から参加するなど、柔軟な対応ができるようになりました。

二〇二二年四月に帰国して、仙台市内で中一の担任に。日本の学校現場はほんとうに忙しくて正直余裕がなく、春ごろは「今年の同時授業はちょっと厳しいかな」と思っていました。でも学校には、世界なんか

興味ない、考えたこともないという子も多い。「この子たちに世界と出会えるキッカケを与えたい」と思い、やはり今年もやろうと決意。五月ごろから、「直接会えない人と交流するオンラインの経験は深い学びになる」と、周囲の先生がたを説得しはじめました。学校の年間計画にないことはやりにくいのですが、総合的な学習やキャリア教育と組み合わせる実行に持っていきました。

第四回は七カ国十五校。一三〇〇人の参加者は小四から高校生まで、ファシリテーターを担った広瀬中の中一はちょうどその中間です。昼休みを利用して講習会をしたり接続テストをしたりして当日に臨み、大役を果たしてくれました。違う年齢の人と対話を進めたという経験は、将来、きつと子どもたちの役に立つと思っています。ごく普通の公立校である広瀬中の生徒たちにとっては、海外の生徒との交流自体が稀有な経験です。緊張しながら質問した体験は、ずっと心に残ると思いますし、他校の動画を見て大いに刺激を受けていたようでした。

こうした取り組みは、続けることに価値があると思います。これからの展開について、いま考えているところです。